



Title	日本の扇の多様性 : 平安時代の絵巻物を手がかりにして
Author(s)	館, 美奈子
Citation	デザイン理論. 2000, 39, p. 110-111
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52971">https://doi.org/10.18910/52971</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 日本の扇の多様性

— 平安時代の絵巻物を手がかりにして —

館美奈子 / 大阪芸術大学

日本の扇は団扇・檜扇・現在、扇子と称される紙扇と大きく三つに分類される。このなかで檜扇はその発生時から公家社会の正装の「料」として存在したために、一般には馴染みのない扇となっている。現在においても、儀式や芸能にたずさわる以外は、私たちが気軽に手にする扇は団扇または紙扇であり、風を送って涼むためのものとなっている。

古来からの人々と扇の関係は、文学および絵画作品からうかがい知ることができるが、平安末期～鎌倉初頭にかけての絵巻物は、他の時代の作品に比べてりわけ扇の出現率が高い。そこには、老若男女身分を問わず、人々がこぞって紙扇を携帯している当時の様子が認められる。しかし、紙扇で涼む姿というのは不思議と少なく、何かしらの動作に付随しての使用となっている。

本例会では、平安時代の絵巻物を中心とする作品群を手がかりに、そこにみられる様々な扇の用法とその意味合いを紹介し、涼むための道具ではない扇の側面を探り、人々が扇を愛好した理由を導き出し、扇の多様性を報告した。今回は特に紙扇を中心に取り上げた。

### 1. 公家と扇（『源氏物語絵巻（隆能源氏）』から）

檜扇は近世まで、基本的には公家社会専用の扇であり、公家が認めた僧侶、武家などに、その使用が限られていた。『源氏物語絵巻（隆能源氏）』は、公家社会が舞台であるため、檜扇の使用が描かれている。そこには檜扇と紙扇との明確な使い分けが認められ、公家に

おける扇のありかたが示されている。それは、公の場面では季節を問わず檜扇を携え、夏に該当する私的な場面では紙扇を持つ公家の扇についての営為である。さらに紙扇には、登場人物の感情の投影が認められ、公の立場を示す檜扇からは汲むことのできない個人的な心情を映し出すものとして描かれている。そこから、当時の公家社会における二つの扇への意識をうかがい知ることができる。

### 2. 多様な扇の用法

一般庶民と扇の関係は『伴大納言絵詞』、『年中行事絵巻』、『鳥獣戯画』の作品に、現代では希薄になってしまった私たちと扇との関係からは想像もできないほど、生活に密着した様子が描かれている。彼らが手にしている扇は圧倒的に紙扇である。それらの作品から認められる紙扇は、①指し示す、②移動を促す、③骨の隙間から覗き見する（図1）、④口元を隠すために用いられ、⑤額や頭上に持ち上げて何かを遮ったり、⑥何らかの騒動を煽り立てるために使用されている。さらに神霊の光臨を求める目的で⑦立てられたり、⑧踊る、⑨走る、⑩祈るといった場面でも紙扇は用いられている。以上の事例から、紙扇は、単に涼むための道具だけではなく他の多様な使用法が認められる。

### 3. それぞれの用法における紙扇の意味合い

扇の描かれている場面を絵画作品から抽出してみると、ある共通の意識のもとで扇が扱われていることがわかる。特に紙扇においては実用とされる「あおいで涼をとる」姿は

ほとんど描かれておらず、火を起こしている状況も見つけることができない。当時の人々が紙扇をそのような実用性だけで携帯しておらず、むしろ精神的な側面でもって携帯していたのではないかと考えられるのである。

①指し示す、②移動を促す、⑤頭上や額まで持ち上げるといった使用法は紙扇を自分の手の代用品としていることから、利便性のある実用品としての扱いの部類に入るが、それ以外の用法はどうであろうか。

⑦立てる、⑧踊る、⑩祈る時、紙扇は神招ぎの意識を持って用いられ、⑥煽りたてる場面では人々のエネルギーを発揮させる効果を求めて使用し、③扇の骨の隙間から覗き見をしたり、④扇で口元を隠すのは、自分に被害が及ぶのを防ぐための行為であると考えられる。ここで列举した絵画作品の舞台は京の都を中心とする地域であるため、厳密に言えば、その地域に暮らす同じ時代の人々の知り得ていた、紙扇に対する、状況に応じた効果効能への共通の意識が認められる。それは、人間を遥かに超えた力、またはお守りのような力といった紙扇についての民間信仰といえよう。その意識がすでに生活に根付いていたからこそ、人々はこぞって紙扇を持ち歩いているのであろう。

さらに、絵画に登場する紙扇からは、様々な感情が伝わってくる。人間の心情を象徴していたり、神仏への信仰心の表れであったりなど、言葉ではなかなかうまく表現出来ない気持ちがみてとれる。感情、気持ち、人間性など、目に見えないものを表現しているともいえる。口に出してしまえば、態度に出してしまえば角が立つ人間関係も、紙扇の使いによって、相手に意志をやんわりと伝えることが可能となるのである。日本人の資質として上げられる「奥ゆかしさ」「曖昧さ」などの表現に紙扇が関わってくる可能性が推測され

る。

## まとめ

このように、人々が生活の中で紙扇を様々な用途に使用している様子は、現代の暮らしの中ではみることのできない状況である。何故、このように紙扇を常備していたのかについては、実用と信仰への対応が紙扇一つで可能であったことが要因として挙げられるのではないだろうか。ここでの実用とは涼むだけではなく、紙扇の扱い方によって自分の意志が婉曲に伝えられる利点であり、ここでの信仰とは神が宿り、人の心を煽り、災いを防ぐといった紙扇の効果を信じる心である。そのような紙扇の使用方が生活に密着するにしたがって人々は紙扇を手放すことができなくなり、生活必需品化し、近代に至るまで愛好し続けられたのだと考えられる。そして、格式にとられない庶民の紙扇の使用方は多種多様となり、紙扇は様々な場面で様々な役割や意味合いを担う多様性を持ったものになったと考えられるのである。



図1「扇の骨の隙間から覗き見する」(『鳥獣人物戯画』丙巻)